

教育現場観察実習が教職意識ならびに 教育実習不安に与える影響

○谷口 弘一・井保森 智彦

(下関市立大学経済学部) (岡山理科大学教育学部)

問題と目的

本研究の目的は、教育学部生を対象として、3年次の教育実習に先立ち、1年次に実施される教育現場観察実習が、学生の教職意識（教職志望度、教職適性感、教師効力感）や教育実習不安に与える影響について検討することである。

春原(2007)は、教育学部3年生を対象として、教育実習前後で、教師効力感が高まることを見いだしている。同様の結果は、五十嵐他(2018)や持留・有馬(1999)においても確認されている。また、三島他(2011)は、教育実習前後で、実習生の役割感が高まり、それによって、とりわけ、女子学生の教職志望度が高まることを明らかにしている。さらに、大野木・宮川(1996)は、教育実習前後で、教育実習不安(授業実践力、児童・生徒関係、体調、身だしなみ)が低下することを見いだしている。

本研究では、教育実習(3・4年次)の前後におけるこうした変化が、教育現場観察実習(1年次)の前後においても、同様に認められるかどうかを検討した。

方法

参加者と手続き 2020年9月下旬～10月上旬の期間に、教育学部1年生21名(男性13名、女性8名、平均年齢18.48歳)が実習前調査に参加した。続いて、2020年11月中旬～2021年10月上旬の期間に、実習前調査に参加した21名のうち、6名(男性2名、女性4名、平均年齢19.00歳)が実習後調査に参加した(参加率28.6%)。以下の分析では、実習前後の2回の調査に参加した6名のデータのみを用いた。

調査内容 調査には、学生ID、年齢、性別を質問する項目に加えて、下記の尺度が含まれていた。(1)教職志望度：三島・林・森(2011)が作成した1項目の尺度を用いた。参加者は、現在どの程度教員になりたいと思っているかについて、5件法で回答した。(2)教職適性感：三島他(2011)が作成した1項目の尺度を用いた。

参加者は、現在、どの程度教員に向いていると思っているかについて、5件法で回答した。(3)教師効力感：教育学部生用教師効力感尺度(春原, 2007)の3つの下位尺度(教授・指導, 学級管理・運営, 子ども理解・関係形成)から、因子負荷量を考慮して、4項目ずつ合計12項目を用いた。参加者は、自分が実習生として教壇に立った場面を想定した上で、各質問項目が自分にどの程度当てはまるかについて、5件法で回答した。(4)教育実習不安：教育実習不安尺度(大野木・宮川, 1996)の2つの下位尺度(授業実践力に関する不安, 児童生徒関係に関する不安)から、因子負荷量を考慮して、4項目ずつ合計8項目を用いた。参加者は、各質問項目が現在の自分にどの程度当てはまるかについて、5件法で回答した。

結果

教職志望度と教職適性感の変容 実習前後で、教職志望度と教職適性感のいずれにおいても、有意な差は認められなかった($t(5) = .42, ns; t(5) = 1.00, ns$)。

教師効力感の変容 実習前後で、教師効力感の3つの下位尺度のいずれにおいても、有意な差は認められなかった($t(5) = -.89, ns; t(5) = 1.47, ns; t(5) = 1.00, ns$)。

教育実習不安の変容 実習前後で、教育実習不安の2つの下位尺度のいずれにおいても、有意な差は認められなかった($t(5) = .00, ns; t(5) = -2.33, ns$)。

考察

実習前後で、教職志望度、教職適性感、教師効力感、教育実習不安のいずれにおいても、有意な変化は認められなかった。

充実した事前指導や事後指導を行ってはいいるが、半日間の実習のみでは、実習の目的のひとつである教職意欲の喚起を始めとして、教職適性感の形成、教師効力感の育成、さらには、教育実習不安の低減を図ることは難しいかもしれない。